

みるく世の謳

みはる 上原美春

12歳。
初めて命の芽吹きを見た。
生まれたばかりの姪は
小さな胸を上下させ
手足を一生懸命に動かし
瞳に湖を閉じ込めて
「おなかすいたよ」
「オムツを替えて」と
カ一杯、声の限りに訴える
大きな泣き声をそっと抱き寄せられる今日は、
平和だと思う。

赤ちゃんの泣き声を
愛おしく思える今日は
穏やかであると思う。
その可愛らしい重みを胸に抱き、
6月の蒼天を仰いだ時
一面の青を分断するセスナによって
私の思いは
76年の時を超えていく

この空はきつと覚えている
母の子守唄が空襲警報に消された出来事を
灯されたばかりの命が消されていく瞬間を
自らに混じった鉄の匂いを
踏みしめるこの土は覚えている
まだ幼さの残る手に、銃を握られた少年がいた事を
おかえりを聞くことなく散った父の最後の叫びを

私は知っている
礎を撫でる皺の手が
何度も拭ってきた涙
あなたは知っている
あれは現実だったこと
煌びやかなサンゴ礁の底に
深く沈められたつらさ
悲しみが存在することを

凜と立つガジュマルが言う
忘れるな、本当にあったのだ
暗くしめられた壕の中が
憎しみて満たされた日が
本当にあったのだ
漆黒の空
屍を避けて逃げた日が
本当にあったのだ
血色の海

いくつもの生きるべき命の
大きな鼓動が
岩を打つ波にかき消され
万歳と投げ打たれた日が
本当にあったのだと

6月を彩る月桃が揺蕩う
忘れないで、犠牲になつていい命など
あつて良かったはずがない事を
忘れないで、壊すのは、簡単だという事を
もろく、危うく、だからこそ守るべき
この暮らしを

忘れないで
誰もが平和を祈っていた事を
どうか忘れないで
生きることの喜び
あなたは生かされているのよと

いま摩文仁の丘に立ち
私は歌いたい
澄んだ酸素を肺いっぱいにとりこみ
今日生きていく喜びを震える声帯に感じて
決意の声高らかに

みるく世ぬならば世や直れ
平和な世界は私たちがつくるのだ
共に立つあなたに
感じて欲しい
滾る血潮に流れる先人の想い

歌いたい
蒼穹へ響く癒しの歌
そよ島風にのせて
歌いたい
平和な未来へ届く魂の歌

私たちは忘れないこと
あの日の出来事を伝え続けること
繰り返さないこと
命の限り生きること
決意の歌を
歌いたい

いま摩文仁の丘に立ち
あの真太陽まで届けと祈る
みるく世ぬならば世や直れ
平和な世がやってくる
この世はきつと良くなつていくと
繋がれ続けてきたバトン
素晴らしい未来へと
信じ手渡されたバトン
生きとし生けるすべての尊い命のバトン
今、私たちの中にある

暗黒の過去を溶かすことなく
あの過ちに再び身を投じることなく
繋ぎ続けたい

みるく世を創るのはここにいるわたし達だ

響け、 平和のうた。

8月15日は、終戦記念日です。

今年、戦後から76年の年月が経ちました。
私たちの住む宮古島でも、76年前は戦場となり、毎日
のようにやってくる空襲から必死に逃げ、食べるものも
なくお腹をすかせ、マラリアなどの病気でたくさん命
が奪われました。宮古島では三千余りの島民が亡くなっ
たとされています。

去る6月23日、慰霊の日には県内各地で追悼式・平和
祈念式が開かれました。

今年の宮古島市全戦没者追悼式と平和祈念式は、新型
コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、規模
を縮小し関係者のみで執り行いました。

また、糸満市摩文仁の平和祈念公園では、沖縄全戦没
者追悼式が開かれました。今年の平和の詩では、
西辺中学校2年生の上原美春さんが玉城
知事らの前で堂々と「みるく世の謳」を
朗読しました。

(上段に詩の全文を載せています)

今回は、上原美春さんの詩とインタビュー、
宮古島の戦跡等について紹介します。

この夏、平和について
一緒に考えてみませんか。

広島原爆投下

8月6日(金) 午前8時15分

長崎原爆投下

8月9日(月) 午前11時2分

戦没者追悼

8月15日(日) 正午

世界の恒久平和
を祈念して、
1分間の黙禱を
捧げましょう。



▲今年の平和祈念式の様子。
献花をする座喜味市長。